

第35回 日本死の臨床研究会年次大会 市民公開講座

厚生労働省委託事業「緩和ケア普及啓発事業」Orange Balloon Project

- 【開催日程】 2011年10月10日（月・祝）
- 【会場】 幕張メッセ国際会議場 コンベンションホール
- 【参加者】 1600人 一般市民および医療関係者
- 【企画報告】

一般参加市民を対象に、第35回日本死の臨床研究会年次大会において、緩和ケアの啓発普及を目的とした市民公開講座を行いました。日本死の臨床研究会は、「死の臨床において患者や家族に対する真の援助の道を全人的立場より研究していくこと」を目的に、1977年から30年以上にわたって、いのちに関わる医療・教育・福祉・生活などの様々な分野で、患者や家族に対して緩和ケアの啓発普及活動을続けております。

本大会のテーマは「いのちの支えー生と死、その苦悩と癒し」としました。

市民公開講座では、廃墟となった多摩川の再生に成功した山崎充哲氏に「いのちの川」を、がん体験者でジャーナリストの鳥越俊太郎氏に「鳥越俊太郎の死生観」を講演して頂きました。参加費は無料とし、東京都、千葉県の子民に対して、ポスター・チラシの配布、新聞・地域広報誌へのPRを行いました。事前登録は、300名であり、当日は1600名の席が一杯となりました。

- ①市民公開講座1（13:00～14:00）山崎充哲氏「いのちの川」（座長：粕田晴之）
- ②市民公開講座2（14:10～15:10）鳥越俊太郎氏「鳥越俊太郎の死生観」（座長：山崎章郎）



第35回 日本死の臨床研究会年次大会
The 35th Japanese Association for Clinical Research on Death and Dying, OCT.9-10 2011 Makuhari

会期 2011(平成23)年10月9日(日)～10日(祝)
会場 幕張メッセ 国際会議場(千葉県千葉市)

○大会長 林 章敏(聖路加国際病院緩和ケア科医長)
小松 浩子(慶應義塾大学看護医療学部教授)
○実行委員長 高宮 有介(昭和大学医学部医学教育推進室主任講師)

いのちの支え ー生と死、その苦悩と癒しー

特別講演 「いのちを生きる」 日野原重明
教育講演 「死は真(まこと)の人生のはじまり」 柳田邦男
「最後まで希望をもって生きられるか」 清水哲郎
「人として生きる」 粕田哲夫
市民公開講座 「鳥越俊太郎の死生観」 鳥越俊太郎 ほか
＜詳しくは裏面をご覧ください＞

【参加費】
会 員 8,000円
非会員 10,000円(抄録集含む)
学 生 3,000円(抄録集含む)

参加事前申し込み
→8月19日正午まで
・間に合う方は事前申し込みをお勧めします
・ホームページから申し込みます
・当日参加も、もちろん可能です

第35回日本死の臨床研究会年次大会事務局
〒180-8582 東京都新宿区信濃町35番地
慶應義塾大学看護医療学部内
FAX 043-298-0529
e-mail: jard35@m-messe.co.jp
ホームページ <http://www.jard35.com/>

第35回 日本死の臨床研究会年次大会
The 35th Japanese Association for Clinical Research on Death and Dying

市民公開講座

日時 2011年10月10日(月・祝)
午後1:00～3:10(開場12:30)
場所 幕張メッセ 国際会議場 コンベンションホール
参加費 無料

講演1 「いのちの川」 1:00～2:00
講師: 山崎充哲 (「おさかなポストの会」代表)
座長: 粕田晴之 (栃木県立がんセンター 脳科・緩和医療部)

講演2 「鳥越俊太郎の死生観」 2:10～3:10
講師: 鳥越俊太郎 (ジャーナリスト)
座長: 山崎章郎 (ケアタウン小平クリニック)

- ・市民公開講座は参加無料です。
- ・どなたでもお聞きいただけます。
- ・当日参加は可能ですが、できるだけ事前の申し込みをお願いいたします(裏面をご覧ください)。

＜お問合せ＞
大会実行委員会事務局(幕張メッセ内)
TEL:043-296-0001 FAX:043-296-0529
e-mail: jard35@m-messe.co.jp
大会ホームページ: <http://www.jard35.com/>

〒233-0292 千葉県流山市長官邸ビル 緩和ケア普及啓発事業
Orange Balloon Project オレンジバルーンプロジェクト

主催: 日本死の臨床研究会 共催: 日本緩和医療学会

1、「いのちの川」山崎充哲氏（ガサガサ水辺の移動水族館 おさかなポストの会代表）



山崎さんは、ご講演10日前に心筋梗塞で入院。今回は外出許可を得てのご講演でしたが、病など感じさせない力強いお話と、多摩川の美しい四季風景と多摩川で元気に遊ぶ子供たちの画像のオンパレードで、おおいに聴衆の癒しとなりました。

(1)昭和40年代、多摩川は生活排水に汚染されていました。その「死の川」で、泥まみれになって、生き延びている魚を探し、多摩川清流化に挑み続けた山崎さん曰く、「多摩川流域の人達が、いかに川と一緒に生きていかを考えないと、本当の再生には繋がりません。」と。

(2)「観賞魚をいらなくなったから捨てる？ 外来種で肉食だから駆除する？ いいえ、棄てていい“いのち”はないのです。」

最近注目されている「おさかなポスト」とは、色々な事情で飼えなくなってしまった熱帯魚などを預かる生け簀のことです。外来魚の多摩川放流を防ぐと共に、預かった魚の里親(保育園、幼稚園、学校、高齢者施設、障害者施設、児童養護施設など)を探します。「学校では、子ども達みんなで魚を育てることで、身近に命を感じ、命の大切さを考えるようになります。」山崎さんの優しさで生まれた子供たちの中には、山崎さんの仕事を引き継ぐ次世代の後継者も生まれているようです。

2、「鳥越俊太郎の死生観」鳥越俊太郎氏



鳥越氏は、自らの4度にわたるがん手術の体験を織り交ぜながら、幼少時から現在に至るまでの生死にまつわる体験を、最後にはご自身が望む葬儀の在り方まで、ユーモアを交えて語り、多くの聴衆に、感動と示唆を与えました。